The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	継続相を表すaway について ： 語彙概念構造による分析
Author(s)	山本, 恵子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 77-86
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62097
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

継続相を表す *away* について
―語彙概念構造による分析―

山本恵子

1. はじめに

不変化詞 *away* は、(1)のような文で使用される場合、空間的な意味（～離れて）ではなく、継続相の意味（～し続ける）で解釈される。

(1) a. The light *flashed away* (despite all our attempts to turn it off). (Jackendoff 1997: 540)
b. Bill *slept/waltzed/drank/talked/read/sneezed away*. (Jackendoff 1997: 539)

(1)のように、*away* が継続相として解釈される場合、どのような意味タイプの動詞と共起するのだろうか。また、空間的意味を表す *away* とどのように関連づけられるのだろうか。本稿では、これらの疑問を解決する上で、アスペクト *away* 付加詞規則を提案する。本稿の構成は以下の通りである。2 節で、先行研究の問題点を指摘し、3 節で、付加詞規則を提案し、4 節で、その規則の妥当性を検証し、5 節で、その規則によって、継続相を表す *away* にみられる統語的性質についても原理的に説明できることを示し、6 節で、結論を述べる。

2. 先行研究

Jackendoff (1997:539-542)によれば、(1)のような文で使用される *away* は付加詞であり、おおよそ、‘keep on V-ing’（～し続ける）を意味し、(2)のような状態を表す動詞でなく、(1)のような活動を表す動詞であれば、どんな動詞でも共起できる。

(2) *Celia *sat away*. (Jackendoff 1997: 540)

しかしながら、活動動詞の中でも、(3)のような動詞と *away* が共起する場合、*away* は空間的意味として解釈されるため、活動動詞という意味タイプだけでは、継続相を表す *away* と共起できる動詞の意味的性質として十分ではない。

(3) Mary *walked/jumped/wiggled/crawled away*.

次節では、継続相を表す *away* と共起する動詞の意味タイプを定義し、さらに、その動詞タイプと継続相を表す *away* の合成を可能にする付加詞規則を提案する。

3. アスペクト *away* 付加詞規則の提案

アスペクト *away* 付加詞規則を提案する上で、Jackendoff (1990)による GO 付加詞規則を概観する。Jackendoff (1990: 223)では、*wiggle, jump* のような移動様態動詞と前置詞句 *to the park* のような経路表現が共起する場合、GO 付加詞規則の適用事例として扱われる。GO 付加詞規則とは、*wiggle, jump* のように、本来的に概念関数 GO を含まない動詞でも、その動詞が概念関数 MOVE によって表される動詞であるならば、経路表現と共起する時、随意的に GO 関数がその動詞に編入されることを可能にする規則である。GO 付加詞規則の適用によって、経路表現は概念構造で、概念関数 GO がとる経路の情報を追加する副詞的役割を果す。(3)の例をみてみよう。(3)の不変化詞 *away* は、*to the park* のような前置詞句と同じように移動経路を表し、また、(3)の動詞は概念関数 MOVE で表される動詞である。従って、(3)の動詞と *away* の組合せは GO 付加詞規則の適用事例として扱える。結果として、(3)の不変化詞 *away* は概念構造で、GO の経路項の情報を追加する副詞的役割を果していることがわかる。Jackendoff (1990: 225)では、*belch, sing, whistle, joke, moan, eat* のような音放出動詞や消費動詞もまた、概念関数 MOVE によって表される。しかし、これらの動詞は経路表現と共起できないため、(3)のような移動様態動詞と同じ概念関数 MOVE で表すことは明らかに妥当でない。従って、本稿では、GO 付加詞規則の精度を高めるため、概念関数 MOVE によって表される動詞は、(3)のような移動様態動詞に限定する。

さて、*away* が継続相として解釈される場合、概念構造で *away* はどのような意味的役割を果しているのだろうか。また、空間的意味を表す *away* とどのように関連づけられるのだろうか。Jackendoff (1990:25)の主題関係仮説[1]に従えば、継続相として解釈される *away* も、概念構造のレベルでは、空間的意味を表す *away* と同じように、GO の経路情報を追加する副詞的役割を果すことが期待される。そこで、Jackendoff (1990)の GO 付加詞規則を参考に、(4)のアスペクト *away* 付加詞規則を提案する。

(4) アスペクト *away* 付加詞規則

$[_{VP}\ V_h$ away] may correspond to

$$\left[\begin{array}{l} \text{GO}\ ([_{\text{Mat}}\ \text{ENERGY}]_j\ ,\ [_{\text{Path}}\ \text{AWAY FROM}\ [_{\text{Place}}\ \alpha]) \\ \text{AFF}\ ([\quad]^{\alpha}_{i},\quad) \\ [\text{WITH}\ \left[\begin{array}{l} \text{AFF}\ ([\alpha],\quad) \\ \text{CAUSE}\ ([\alpha],\ [\text{GO}\ ([_{\text{Mat}}\ \text{ENERGY}]_j,\ [_{\text{Path}}\ \text{FROM}\ [_{\text{Place}}\ \alpha])]) \\ {}_{\text{Event}}-\text{BOUNDED} \end{array}\right]_h\ ] \\ {}_{\text{Event}}-\text{BOUNDED} \end{array}\right]$$

[1] 主題関係仮説とは、所有や属性の変化や状態といった意味場は、空間的意味場を表すために使用される概念関数と同じ概念関数によって表されるという仮説である。この仮説によって、異なる意味場でも概念構造では、その平行性を捉えることが可能となる。

(4)の付加詞規則によって、動詞はエネルギーの放出を表し、そして、その事象は非有界的であることが要求される。(4)の付加詞規則では、[V away]の統語形式は大括弧の概念構造に対応づけられる。動詞は指標 *h* によって、概念構造の従属節（With 句）に対応づけられる。従属節には動詞の概念構造の情報が入る。従属節は、「動作主がエネルギーを放出することを引き起こす」ことを表す。動詞は非有界事象を表すため、動詞が表す事象は反復される。主語は指標 *i* によって、概念構造の主節の行動主(Actor)に対応づけられる。主語はさらに、主節の行動主を通して、従属節の行動主、従属節の動作主(Agent)、従属節と主節の移動経路の起点(Source)といった複数の意味役割を担っていることが α による束縛関係によって保証される。移動物であるエネルギーは主題項 (Theme)であり、この項は概念構造において必須の項だが、統語構造では明示されなくてもよい。(4)の概念構造は「主語による反復的エネルギーの放出に伴って、エネルギーが連続的に流れてゆく」ことを表す。動詞が表す非有界事象に伴って、(4)の動詞句全体の概念構造も非有界事象を表す。*away* はエネルギーの移動経路（方向）を表し、GO 関数の経路情報を追加する副詞的役割を果す。このように、概念構造では継続相を表す *away* も空間的意味を表す *away* と同じ副詞的役割を果している。(4)の概念構造において、*away* は物体ではなく抽象的物質の移動の経路を表すため、空間的意味はなくなり、継続相の意味として解釈される。次節では、(4)の付加詞規則の妥当性を検証する。

4. アスペクト *away* 付加詞規則の妥当性について

(5)-(7)の動詞と *away* が共起する場合、*away* は継続相の解釈が得られるが、(8)の動詞と共起する場合、*away* は継続相の解釈が得られない。以下では、継続相を表す *away* と共起できる動詞は、 (4)の付加詞規則によって要求される意味タイプを満たさなければならないことを議論する。

(5) a. She *battered away* at his chest with her fists. (LDOCE)
　　b. He *tapped away* at the keyboard […] (ODE)
(6) a. She *chanted*/*talked*/*sang away*.
　　b. The computer was *beeping away*, with an incomprehensive error message on the screen. (COCA)
(7) a. The soup arrived, *bubbling away* in a huge clay pot thing. (ODE)
　　b. The light *flashed away* (despite all our attempts to turn it off). (Jackendoff 1997: 540)
(8) a. *Celia *sat away*. (Jackendoff 1997: 540)
　　b. *Many earthquakes *occurred away*.
　　c. *The windows *broke away*.

(5)の動詞は打撃動詞である。打撃はエネルギーの放出と考えられる。(5a)の動詞は継続事

象を表す。一方、(5b)の動詞は Semelfactive 動詞であり、一回きりの瞬間事象として解釈されることもできるが、(5a)の動詞と同様に、継続事象としても解釈されることが可能である。従って、これらの動詞は非有界事象を表す。このように、(5)の動詞は、いずれも(4)の付加詞規則の適用条件を満たす動詞である。(9)は(5a)の文の一部 'she battered away'の概念構造である。

(9) she battered away

$$\left[\begin{array}{l} \text{GO}\ ([_{\text{Mat}}\ \text{ENERGY}]_j\ ,\ [_{\text{Path}}\ \text{AWAY FROM}\ [_{\text{Place}}\ \alpha]) \\ \text{AFF}\ ([\text{SHE}],\quad) \\ [\text{WITH}\ \left[\begin{array}{l} \text{AFF}\ ([\alpha],\quad) \\ \text{CAUSE}\ ([\alpha],\ [\text{GO}\ ([_{\text{Mat}}\ \text{ENERGY}]_j,\ [_{\text{Path}}\ \text{FROM}\ [_{\text{Place}}\ \alpha])]) \\ {}_{\text{Event}}\text{−BOUNDED} \end{array}\right]\ ] \\ {}_{\text{Event}}\text{−BOUNDED} \end{array}\right]$$

(9)の概念構造は、「彼女の反復的打撃（エネルギーの放出）に伴って、絶えずエネルギーが流れていく」ことを表す。

次に、(6a)の動詞は、Croft(2012: 61)によれば、反復的な音の放出(a repeated emission of certain types of sounds)を表す動詞であり、動詞自体、継続事象を表す。(6b)の音放出動詞は Semelfactive 動詞であるが、(6a)の動詞と同様に、継続事象の解釈が可能な動詞である。音はエネルギーの一種と考えられる。このように、これらの動詞も(4)の付加詞規則の条件を満たす動詞である。(10)は(6a)の文の概念構造である。

(10) she chanted/talked/sang away

$$\left[\begin{array}{l} \text{GO}\ ([_{\text{Mat}}\ \text{ENERGY}]_j,\ [_{\text{Path}}\ \text{AWAY FROM}\ [_{\text{Place}}\ \alpha]) \\ \text{AFF}\ ([\text{SHE}]^{\alpha},\quad) \\ [\text{WITH}\ \left[\begin{array}{l} \text{AFF}\ ([\alpha],\quad) \\ \text{CAUSE}\ ([\alpha],\ [\text{GO}\ ([_{\text{Mat}}\ \text{ENERGY}]_j,\ [_{\text{Path}}\ \text{FROM}\ [_{\text{Place}}\ \alpha])]) \\ {}_{\text{Event}}\text{−BOUNDED} \end{array}\right]\ ] \\ {}_{\text{Event}}\text{−BOUNDED} \end{array}\right]$$

(10)の概念構造は「彼女の音（エネルギー）の反復的放出に伴って、絶えず音（エネルギー）が流れていく」ことを表す。

(7a)の動詞は泡の放出を表し、継続事象を表す。(7b)の動詞は光放出を表し、Semelfactive 動詞であり、継続事象の解釈が可能な動詞である。泡、光もエネルギーの一種とみなせる。このように、これらの動詞も(4)の規則によって求められる動詞の性質を満たしている。

(8a)の動詞は空間的形状を表し、この動詞の概念構造は(11a)になる。この動詞は場所項を

とるため、*away* と共起する場合、(11b)で示されるように、*away* は動詞の場所項に融合される。そのため、*away* は位置の意味で解釈される。*away* は本来的に経路を表すが、(11b)のように、場所項をとる動詞と共起する場合、場所の意味に拡張される。(8a)の動詞のように、(11)の概念構造を持つ動詞は、(4)の規則が要求する動詞の意味タイプと一致しない。そのため、その動詞に(4)の規則は適用されない。

(11) a. sit:[$_{\text{Event}}$ INCH([$_{\text{State}}$ BE ([X], [$_{\text{Place}}$ Y])])] (Jackendoff 1990:93)

b. sit away:

[$_{\text{Event}}$ INCH([$_{\text{State}}$ BE ([X], [$_{\text{Place}}$ AT A PLACE [$_{\text{Path}}$ AWAY FROM [$_{\text{Place}}$ SOURCE]])]])]

(8b), (8c)の動詞はいずれも変化結果を含意し、有界事象を表すため、(4)の付加詞規則が要求する動詞に課された条件を満たさない。そのため、(8b), (8c)の事例は容認されない。

このように、(4)の付加詞規則は、継続相を表す *away* と共起する動詞を予測可能にする。しかし、(12)のような動詞の場合、これまでの動詞のように活発な動作を伴わない点で、一見すると、エネルギーの放出と関連づけられない動詞に見える。

(12) a. Bill *slept away*. (Jackendoff 1997: 539) (=1b)

b. He *thought away*.

(12)の動詞のように、不活発な活動を表す動詞に関して、Croft (2012: 100)で述べられることには、*sleep* や *think* は一時的な状態を表すが、これらの動詞も目に見えない内的な作用や心的活動を伴っている。さらに、Comrie (1976: 49)によれば、状態と動的な状況を対比した場合、動的な状況は動的な変化がなくても、その状況は絶えずエネルギーの新たな入力を受けることによって、その状況が維持される。従って、(12)のような不活発な活動を表す動詞でも、動作主が絶えずエネルギーを出力しているため、その活動が継続されることになる。そうすると、これらの動詞でさえも、(4)の付加詞規則によって要求される動詞の意味特性を満たしていることになる。

5. 先行研究の問題点について

Jackendoff (1997)によれば、継続相を表す *away* の統語には、ある特有の性質がみられる。5 節では、本稿で提案するアスペクト *away* 付加詞規則による分析に基づけば、そのような統語的現象でさえも、原理的に説明可能になることを論じる。まず、5.1 で、その統語的特徴を概観し、5.2 で、本稿が提案する付加詞規則を使って、その現象を説明する。

5.1 継続相を表す *away* の統語的特徴

Jackendoff (1997)によれば、継続相を表す *away* が使用される時、(13)のように、動詞はそ

の直接目的語をライセンスできない。

(13) a. *Dave *drank scotch away*.
b. *Dave *danced waltzes away*.
c. *Dave *read newspapers away*. (Jackendoff 1997: 539)

一方、動詞の前置詞補語（斜格補語）は問題なく生起できる。

(14) a. Hilary *talked away about her latest project*.
b. Sally *screamed away* at me. (Jackendoff 1997: 539)

次に、(15)のように動詞の直接目的語でも、その直接目的語の前に前置詞を置くと（いわゆる動能構文）、*away* は継続相の意味で解釈され、その文は問題なく容認されるようになる。

(15) Billy *bashed away* at the piano. (Jackendoff 1997: 540)

先行研究では、上述のような継続相を表す *away* の統語的特徴が指摘されているが、なぜそのような統語的特徴を示すのかについて、その要因は解明されていない。

5.2　アスペクト *away* 付加詞規則による考察

(4)の付加詞規則に基づいて、5.1 で取り上げた問題を考察する。5.2.1 で、(13)の動詞の直接目的語が生起できない要因について、(4)の概念構造の主題項が関連していることを論じる。また、*away* の意味解釈と直接目的語の有界性の関係について議論する。5.2.2 で、動詞の直接目的語が(15)のように前置詞句にされた場合、その前置詞句は概念構造で、副詞的役割を果すことを主張する。

5.2.1　直接目的語について

(4)の付加詞規則によって、概念構造の主題項はエネルギーであることが指定されている。そのため、もし目的語が統語的に具現化される場合、その目的語はエネルギーとして解釈されるものに限定される。(21)の文が容認されない要因は動詞の直接目的語がエネルギーとしても、エネルギーの下位レベルである音や光などの放出物としても認識されないことにある。

(16) a. *Dave *drank scotch away*. (=13a)
b. *Dave *danced waltzes away*. (=13b)
c. *Dave *read newspapers away*. (=13c)

一方、(17)の動詞の直接目的語は放出物を表し、エネルギーの下位タイプとみなせる。従って、(17)の文は意味構造の主題項が統語的に具現化された事例だと言える。(17)の直接目的語は(4)の概念構造に指定される主題項の意味情報（エネルギー）と整合するため、直接目的語はライセンスされる。(17)の *away* はいずれも継続相として解釈される。

(17) a. He's *flashing away his lights*. (ODE)
b. We climbed the bank and were soon *blazing away our first shots* in war. (COCA)
c. We heard woodpecker *tapping away their territorial claims*. (COCA)
d. […] it's fair to *fire away questions*. (COCA)

(18)は、直接目的語が統語構造に具現化された場合の統語構造と概念構造の対応関係を表す。直接目的語は指標 *j* によって、意味構造の主節の被動作主(Patient)に対応づけられ、さらに、主節の被動作主を通して、従属節の被動作主、従属節と主節の主題項といった複数の意味役割を担っていることが β による束縛関係によって保証される。

(18) $[_{VP}\ V_h$ away $NP_j]$ corresponds to

$$\left[\begin{array}{l} \text{GO}\ ([_{\text{Mat}}\ \beta], [_{\text{Path}}\ \text{AWAY FROM}\ [_{\text{Place}}\ \alpha]) \\ \text{AFF}\ ([\quad]^{\alpha}{}_{i}, [\text{ENERGY}]_{j}{}^{\beta}) \\ [\text{WITH}\ \left[\begin{array}{l} \text{AFF}\ ([\alpha], [\beta]) \\ \text{CAUSE}\ ([\alpha], [\text{GO}\ ([_{\text{Mat}}\ \beta], [_{\text{Path}}\ \text{FROM}\ [_{\text{Place}}\ \alpha])]) \\ {}_{\text{Event}}\text{−BOUNDED} \end{array}\right]_h\ ] \\ {}_{\text{Event}}\text{−BOUNDED} \end{array}\right]$$

(19)は(17a)の文の概念構造である。概念構造の主節の被動作主項 ENERGY に HIS LIGHTS の解釈が融合される。

(19) He flashed away his lights

$$\left[\begin{array}{l} \text{GO}\ ([_{\text{Mat}}\ \beta], [_{\text{Path}}\ \text{AWAY FROM}\ [_{\text{Place}}\ \alpha]) \\ \text{AFF}\ ([\text{HE}]^{\alpha}, [\text{HIS LIGHTS}]^{\beta}) \\ [\text{WITH}\ \left[\begin{array}{l} \text{AFF}\ ([\alpha], [\beta]) \\ \text{CAUSE}\ ([\alpha], [\text{GO}\ ([_{\text{Mat}}\ \beta], [_{\text{Path}}\ \text{FROM}\ [_{\text{Place}}\ \alpha])]) \\ {}_{\text{Event}}\text{−BOUNDED} \end{array}\right]\ ] \\ {}_{\text{Event}}\text{−BOUNDED} \end{array}\right]$$

このように、本稿で提案する付加詞規則は、(16)と(17)のような動詞の直接目的語の生起に関する違いも何の問題もなく対処することができる。

もう一つ注目に値することは、(17)の直接目的語が複数形で表されていることである。この場合、直接目的語によって表される放出される物質量は非有界的であり、その非有界性は、文全体の事象が表す非有界性と一致する。そのため、その文に生起する *away* は継続相として解釈される。一方、(20)のように、*all* によって、放出される物質量が有限にされる場合、それに伴って、文全体も有界事象になる。そのため、*away* は完了（し尽くす）の意味で解釈され、継続の解釈は得られない。

(20) a. He took a hand in this fight, *shot away all his ammunition*, and was forced to return to his aerodrome to replenish it. (Laurence La Tourette Driggs, *Heroes of Aviation*)

b. […] he *fired away all the questions* at her. (Becky Roach, *The Devil Incarnate*)

away は、(4)の規則によって、概念構造で、GO の経路の情報を追加する副詞的役割を果し、*away* 自体には、その事象の完了性を決定する性質はない。(20)の事例に関して、その直接目的語は複数量の弾薬や質問を表すことから、弾や質問が反復して放出される点では、(17)の事例と同様に、動詞は継続事象を表す。しかし、(20)の場合、その継続事象は *all* によって有限にされるため、その文全体の事象は有界的になる。(21)は(20a)の文の概念構造である。動詞自体は非有界事象を表すが、ALL によって、その直接目的語の物質量は有界性を帯びるため、文全体の事象は有界的になる。そのため、概念構造において、文全体の事象に有界的な素性[+BOUNDED]が付加される。この素性によって、(17)の事例とは有界性について区別される。

(21) He shoots away all his ammunition

$$\left(\begin{array}{l} \text{GO}\ ([_{\text{Mat}}\ \beta],\ [_{\text{Path}}\ \text{AWAY FROM}\ [_{\text{Place}}\ \alpha]) \\ \text{AFF}\ ([\text{HE}]^{\alpha},\ [\text{ALL}\ ([\text{HIS AMMUNITION}]^{\beta})]) \\ [\text{WITH}\ \left(\begin{array}{l} \text{AFF}\ ([\alpha],\ [\beta]) \\ \text{CAUSE}\ ([\alpha],\ [\text{GO}\ ([_{\text{Mat}}\ \beta],\ [_{\text{Path}}\ \text{FROM}\ [_{\text{Place}}\ \alpha])]) \\ {}_{\text{Event}}-\text{BOUNDED} \end{array}\right)\ ] \\ {}_{\text{Event}}\ +\text{BOUNDED} \end{array}\right)$$

5.2.2　動能構文について

(22)の前置詞句 *at the piano* は動作の方向を表し、前置詞 *at* の項 *the piano* はターゲットである。

(22) Billy *bashed away* at the piano. (Jackendoff 1997: 540)　(=15)

そのため、前置詞句 *at the piano* は概念構造で、概念関数 TOWARD によって表される。(23)は動詞の直接目的語が前置詞句によって表される事例の統語構造と概念構造の対応関係を表す。

(23) $[_{VP}\ V_h$ away at $NP_k]$ corresponds to

$$\left(\begin{array}{l} \text{GO}\ ([_{\text{Mat}}\ \text{ENERGY}]_j\ ,\ [_{\text{Path}}\ \text{AWAY FROM}\ [_{\text{Place}}\ \alpha]\ \text{TOWARD}\ [_{\text{Place}}\ \beta]]) \\ \text{AFF}\ ([\quad]^{\alpha}{}_i,\ [\quad]^{\beta}{}_k) \\ [\text{WITH}\left(\begin{array}{l} \text{AFF}\ ([\alpha],\ [\beta]) \\ \text{CAUSE}\ ([\alpha],\ [\text{GO}\ ([_{\text{Mat}}\ \text{ENERGY}]_j,\ [_{\text{Path}}\ \text{FROM}\ [_{\text{Place}}\ \alpha]\ \text{TOWARD}\ [_{\text{Place}}\ \beta])]) \\ {}_{\text{Event}}\text{−BOUNDED} \end{array}\right)_h\ ] \\ {}_{\text{Event}}\text{−BOUNDED} \end{array}\right)$$

動詞の直接目的語 *the piano* は、概念構造の主節の被動作主項に指標 *k* によって対応づけられる。直接目的語は、さらに、主節の被動作主を通して、従属節の被動作主、従属節と主節のターゲットといった複数の意味役割を持つことが β による束縛関係によって保証される。概念関数 TOWARD は経路の方向を表し、概念関数 TO と違って、終点 (GOAL)を含まない。Jackendoff (1991: 36)によれば、概念関数 TOWARD は非有界的である。このため、動詞句全体が表す事象の非有界性は変わらない。(24)は(22)の文の概念構造を表す。

(24) Billy bashes away at the piano

$$\left(\begin{array}{l} \text{GO}\ ([_{\text{Mat}}\ \text{ENERGY}]_j,\ [_{\text{Path}}\ \text{AWAY FROM}\ [_{\text{Place}}\ \alpha]\ \text{TOWARD}\ [_{\text{Place}}\ \beta]]) \\ \text{AFF}\ ([\text{BILLY}]^{\alpha},\ [\text{PIANO}]^{\beta}) \\ [\text{WITH}\left(\begin{array}{l} \text{AFF}\ ([\alpha],\ [\beta]) \\ \text{CAUSE}\ ([\alpha],\ [\text{GO}\ ([_{\text{Mat}}\ \text{ENERGY}]_j,\ [_{\text{Path}}\ \text{FROM}\ [_{\text{Place}}\ \alpha]\ \text{TOWARD}\ [_{\text{Place}}\ \beta])]) \\ {}_{\text{Event}}\text{−BOUNDED} \end{array}\right)\ ] \\ {}_{\text{Event}}\text{−BOUNDED} \end{array}\right)$$

概念関数 TOWARD によって表される前置詞句 *at the piano* は、エネルギーが向けられる経路（方向）を表し、GO 関数の経路情報を追加する副詞的役割を果す。このように、(4)の付加詞規則は、先行研究では解明されなかった継続相を表す *away* の統語的特徴についても適切に扱える。

6. まとめ

3 節で提案したアスペクト *away* 付加詞規則の妥当性を 4 節で検証し、その付加詞規則は、継続相を表す *away* と共起する動詞を予測可能にすることを論じた。また、概念構造による分析を通して、継続相を表す *away* と空間的意味を表す *away* は両方とも概念構造で副詞的役割を果していることを示した。さらに、5 節では、本稿で提案する付加詞規則によって、先行研究で未解決だった統語的特徴に関しても原理的に説明できることを示した。

参考文献

Beavers, John (2013) Aspectual classes and scales of change. *Linguistics* 54: 681-706.

Bolinger, Dwight (1971) *The phrasal verb in English*. Cambridge: Harvard University Press.

Comrie, Bernard (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.

Croft, William (2012) *Verbs: aspect and causal structure*. Oxford: Oxford University Press.

Jackendoff, Ray (1990) *Semantic structure*. Cambridge, MA: MIT Press.

Jackendoff, Ray (1991) Parts and boundaries. *Cognition* 41: 9-45.

Jackendoff, Ray (1997) Twistin' the night away. *Language* 73:534-59.

Jackendoff, Ray (2002) English particle constructions, the lexicon, and the autonomy of syntax. In: Nicole Dehé, Ray Jackendoff, Andrew Mclntyre and Silke Urban (eds.) *Verb particle explorations*, 67-94. Berlin: Mouton de Gruyter.

Lakoff, George and Mark Johnson (1999) *Philosophy in the flesh*. New York: Basic Books.

Levin, Beth (1993) *English verb classes and alternations*. Chicago: University of Chicago Press.

Levin, Beth (1999) Objecthood: An event structure perspective. *Chicago Linguistic Society* 35: 223-247.

Lindstronmberg, Seth (2010) *English prepositions explained*. Revised edition. Amsterdam: John Benjamins.

Rice, Sally (1999) Aspects of prepositions and prepositional aspect. In: Leon De Stadler, Christoph Eyrich (eds.) *Issues in cognitive linguistics*. 225-247. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.

Tenny, Carol (1994) *Aspectual roles and the syntax-semantics interface*. Dordrecht: Kluwer.

Van der Leek, Frederuke (1996) The English conative construction: A componential account. *Chicago Linguistic Society* 32: 363-378.